

今年の大会をかえりみて

(仙台) 矢木明夫

今年の村研大会について「経済学の立場から」何か発言をして欲しいといふ御注文ですが、大会そのものはあまり完全に報告を聽き討論に参加したといえるような模範的(?)態度でもなかつたので、実は恐縮しております。今年の村研大会は私としては大変に興味あり期待される課題をかゝげておりましたので、成果の多いことを願つて出席したわけでした。しかし卒業にいつて、今回の大会は村研メンバーの「実力」を十分發揮して從来の結果を一步前進させるということを願つたようと思われます。それは討論と報告が十分につながりうるような形で、その双方が持たれなかつたということ、つまり報告では慎重を期しての故か報告者の理論的な立場が具体的資料を通して語られず、いわば課題への積極的な働きかけを放棄してしまう傾向があり、それがまた討論となつては村落共同体論が具体的報告資料をもとに議論されることが困難となつて空軒し勝な論議に終る傾きとなつたのではないかとも考えます。一方で貴重な討論や質問にさかれる時間がきわめて短くしかも他方で少數者の発表にせいたくな時間がさかれ、それが討論へのねじ渡しを十分に

果していないとあつては、村研のメンバーの衆智をあつめその実力を發揮させることなど無理であつたのではないでしようか。自己反省をふくめて次回のためにもつと工夫したい気がいたします。

とはい、私にとつて教えられる点や問題をなげかけられた点は決して少くありませんが、その一つとして、かなり共通の研究でした。その一つとして、かなり共通の研究分析の態度がとられながら、その統合、そしてそこに統合的な村落構造論がつくり込まれます。もつと具体的にいえば、生産、ひらく生活における共同体的諸組織の分析が進められる一方、いわばこうしたものを持続として累積とか統合、あるいは制度化といつたようなものの上に村落の本質を問題とする場合の考え方にはかなりの大きな差異があることを知りました。あるいは社会学にとつては古くからの問題なのかもしれませんが、少くとも、まだ未解決のしかも重要な問題と私は思われます。いい落しましたが常識的な「経済学の立場から」という言葉は、私には共同体諸組織のうちの対象方面への重心のかけ思われます。いい落しましたが常識的な「経済学者が共同体を攻撃して独自な見解を出したことが少くないことも否定しませんが、これがまた討論となつては村落共同体論の方法として「経済学の立場」からするものがあるとは思われません。勿論、今日まで

このうち後者、即ち松原氏の御見解は大会では十日博士の「自然村」説、つまり「村は発展しない成長する一個の精神であり、行動の原理である。それは單なる集団又は社会團體の累積体ではない」というような見解の御支持であります。私はとつて教えられる点や問題をなげかけられた点は決して少くありませんが、その一つとして、かなり共通の研究分析の態度がとられながら、その統合、そしてそこに統合的な村落構造論がつくり込まれます。もつと具体的にいえば、生産、ひらく生活における共同体的諸組織の分析が進められていました。それは御見解でいふと、このうち後者、即ち松原氏の御見解は大会では十日博士が執筆されていて、御主張を御見しました。これは、即ち、松原氏の御見解の意味がいくらかはつきりして、なにか集団の累積的統一をうながす前提要件があつて結果的に累積しているのではなくて、なにか集団の累積的統一をうながす前提要件があつて結果的に累積しているのだと考へるべきである。第二にその点、「集団性の外特」が、「日本では部落という形で人為的・政治的に明確な義打ちがなされている」といふべきである。第三に「生活上の問題いかえれば相互通扶助の社会關係のばあいにはもうひとつの規制要因を予測できる。『地域社会的拘束』

ある。こうした御見解を支える「集団の累積的統一をうながす前提要件」とか、部落とかあるいは「地域的拘束」とかいわゆる概念が村落構造の本質にとつて重要なあるということが、歴史的にそうであるのか、明治以後の市町村制の村についてだけそうであるのか必ずしも明らかでないが、この点はます大きな問題ではないでしょうか。一般に近代以前の村落をとりあげるに当つても、村落に地域性の問題が大変重要な考え方として、血縁から地縁へとか、あるいは地域社会を村落規定の中核にえたりされますが、それが対象化される行政的制度的な村がかえつて、その性格や範囲などの点でも、基本的に歴史的に生産力の発展で変化する共同体的諸組織の側から説明されなければわからないと思います。自然村説の形而上学的観念論的奥味という側面については他からの御批判もありますのでここではふれません。紙数がないので止めますが、村落の本質における地域性の著しい重要性を近代における特殊性としてみてゆくときはじめて村落構造の特殊歴史的段階的差異が明かになるのではないでしょうか。述べたいことはまだ多いですが今後の機会をもつことにいたします。